

7

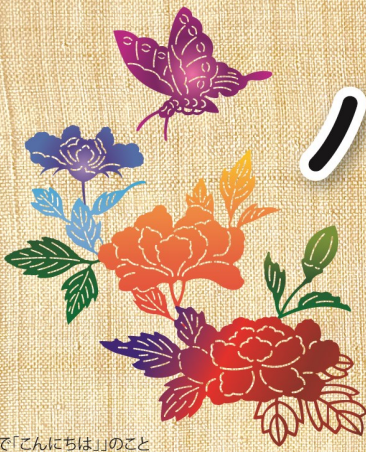
月

Jul.2025

沖縄開教本部通信
vol. 118

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

ハイサイ 沖縄



「琉球国 海外貿易の名残」

沖縄県工業技術センター 豊川哲也

明治以前、沖縄は琉球国という独立国家でした。琉球は、今も昔も土地が狭く痩せており、台風の影響などにも重なるため農業で発展することは困難です。

そこで実行したのが海外貿易で利ザヤを稼ぐこと。十四から十六世紀には遠くフィリピンやマレー半島まで貿易に出かけました。

その名残が沖縄の言葉にも残っているんですよ。まずは、皆さん良くご存じのチャンプル。チャンプルは、野菜と豆腐を混ぜて炒めたおかずのことを指し、ゴーヤーと豆腐を混ぜるとゴーヤーチャンプル、もやしを混ぜるとマーマナー（豆菜）チャンプルとなります。このチャンプルという言葉はマレー語に由来するといわれています。マレー語では混ぜることをチャンプルといい、料理名でもナシ（ご飯）・チャンプルと言う形で使われています。ただ、沖縄ではチャンプルは、料理の場合、混ぜるだけではなく炒めるというニュアンスが入りますが、マレー語でのナシ・

チャンプルは、ご飯と色んなおかずの混ぜたものということで、炒めるという意味はなさそうです。ほかにマレー語由来としては、クミスクチンという薬草があります。



マラッカの食堂メニュー。中央にナシ・チャンプルの表記が見える。下はナシ・チャンプル。

す。クミスクチンとは、沖縄の三大薬草のひとつで腎臓病や高血圧、糖尿病などに効果があるといわれ、王朝時代は専売制だった貴重な薬草です。これは、ずばりそのまま、マレー語でもクミスクチン（マレー語で猫のひげの意）です。

また、沖縄語には古代大和言葉が多く残っているといわれています。万葉集に「み吉野の 秋津あきづ」の小野（おの）に刈る草（かや）の 思ひ乱れ

て寝ぬる夜（よしぞ多き」と読まれている句中の「あきづ」はトンボのことですが、沖縄ではトンボを「あーけーじゅー」といい、秋津が変化したものだそうですよ。

そして、中国語。中国語はさすがに多いですね。暑い沖縄で欠かせない「さんぴん茶」。さんぴん茶はジャスミンの花で香りを付けたお茶のことですが、中国語では香片茶（シイアン ピイエン チャ）。他にも「ぼんしるー（グワバ、番石榴（ファンシールー）」、「いゆ（魚、魚（ユイー）」、「たうちー（軍鶏、斗鶏（どうじー）」などなど、料理名や素材名から東南アジアとの大交易時代を想像してみるのも楽しいですね。



さんぴん茶。沖縄の暑い夏にぴったりの爽やかな香りのお茶。

ハイサイ沖縄

【玉代勢 法雲師 祥月法要】

五月十日に沖縄別院にて玉代勢法雲師祥月法要を執り行った。
別院に縁のある多くの方々が来院され、長谷輪番が法話の中で法雲師の生い立ちを紹介された。
法雲師は九歳の時、琉球別院で得度し、後にハワイの開教使として移住する。当時の米国で苦しい立場にあった日系人の中にあり、さらに不当な扱いを受けた沖縄系移民。

戦後八〇年 非戦・平和沖縄研修会開催

「米軍基地を『笑い』
・向き合う」

四月二十二日から二十四日の三日間、第二十五回非戦・平和沖縄研修会が開催された。

初日は、コント「お笑い米軍基地」と小波津正光氏による講話をいただきたい、「笑い」を通して沖縄で起きている日本の問題を考えた。

二日目のフィールドワークでは、糸満市の魂魄の塔・菩提樹苑、読谷村のチ

師はその差別や偏見の克服を使命と感じ、生涯ハワイ在住沖縄系移民の地位向上に尽力した。
そして今、法雲師の設立されたマカレー東本願寺より、御本尊と莊嚴、「兵戈無用」の文字が刻まれた鐘を当別院が受け継ぎ、師の想い、願いが鐘の音とともに沖縄の地で響いていく。



ビチリガマ・教化拠点「何我寺」、名護市辺野古の米軍基地建設現場に赴き、今沖縄で何が起きているのか、八十年前はどんな事が起こっていたのかを学んだ。
特にチビチリガマではガマ（洞窟）の奥まで入ることができ、避難者の当時を追体験した。
三日目は佐喜眞美術館を訪れた後、沖縄別院で、沖縄と世界をつなげる活動をしているCFPのメンバーによる沖縄の現状の報告と、意見交



読谷村教化拠点「何我寺」にて

換をして日程を終えた。



玉代勢法雲氏



法要の様子

コラム

「グリーンフワークの実践」

西田 和正

「グリーンフワークおきなわ」という団体が設立されて今年で十六年になる。医療従事者や教職員、宗教者などが、教派を超えてボランティアで運営してきた。沖縄別院も当初より積極的にかかわっている。

「死別の悲しみに寄り添う・悲しみのうちなる豊かさを信じて」という標語のもと、年二回ほどではあるが、グリーンフワークにかかわる様々な勉強会や講演会を開催してきた。また、実践としての「語る場 うりずん」では、これまで多くの参加者とともに自らの悲しみや辛さ、苦しみ、詰まったお話を聞かせていただく中で、悲しみに暮れる中から、故人をおもうことや、また一歩人生に踏み出していく力強さに出会わせていただいた。

今回、新しいメンバーが増えたということもあって、「語る場 うりずん」のファシリテータの研修を行っている。カールロジャースの来談者中心療法をベースに、アレンアイビーのマイクロカウセンシングの技法を取り入れ、「傾聴」という技術の習得を目指している。また顧問の臨床倫理士によるファシリテータのスーパーバイズも行っている。曰く、「専門家は常に考えることを忘れず、思考停止に陥らないことが大切」とのこと。どうしていいかわからなくなったときはすぐに答えを求めたくなるが、いまここの私が何を考え、感じているかをしっかりと認識し、自覚することからはじまると。専門家と呼べるほどにもないが、人生においても大切なことだと感じる。